

月影



第43号

てんじょうてんげ

天上天下

ゆいがどくそん

唯我独尊

釈迦しゃか



遙か昔から
脈々と受け継がれてきた
この「いのち」。

あらゆるすべての
世界の中で、
誰にも代わりはできない
たった一つの
「私」という尊い存在。

あなたも同じ
たった一つの
尊い存在。

お経の話

何が書いてあるの？

浄土宗西山勤行式（赤本）解説

送佛偈

そうぶつげ

諸佛随縁還本国

普散香華心送佛

願佛慈心遥護念

同生相勸尽須来

（訳）もろもろのみ仏よ、それぞれの縁にしたがって本国にお帰りください。あまねく香を薫じ、華を散じて心を込めてお送り致します。願わくはみ仏よ、慈悲のみ心をもって、遥かかなたより護り念じてくださいますように。私どもと同じ信仰によって既に極楽浄土へと往生された方々も、皆共に勧めあってお出でくださり私たちをお護りください。

「お勤め」がひととおり終わったので、今まで道場（部屋）におられた阿弥陀如来さまをはじめ大勢のみ仏さまたちに、お浄土へお帰り願う時が来ました。

家庭でも、お招きしたお客様がお帰りになる時には、玄関までお見送りし、お別れのあいさつをして別れるのが礼儀ですが、み仏さまの場合も同じであり、この送佛偈を唱えて心を込めてお送りします。

後半の句、「願仏慈心遥護念（仏の慈心、遥かに護念したまえ）」は、はるかお浄土の彼方からでも、私たちのことをお守りくださいという願いを込めた句です。

この願いは、仏さまだけではなく、お浄土におられる今は亡き家族や友人に向けて、「往生したあと、六神通の力を得て、再びこの世に帰って来て、苦しみの中にいる人々を救ってください。」という願いでもあるのです。

今回をもって、赤本解説を終わります。

花まつり

四月八日は、お釈迦さまがお生まれになった日です。

お寺では、誕生仏に甘茶をかけて法要し、お釈迦さまのお誕生をお祝いします。これを「花まつり」と言います。

お釈迦さまは、インドの花畑でお生まれになり、その時、空から龍が甘露（かんろ）の雨を降らしてお祝いしたと伝えられています。このことから、花まつりで誕生仏に甘茶をかけるようになりました。



花御堂のお釈迦さま

あれこれ仏教用語

舍利しやり

お寿司の白米飯のことを「シヤリ」と言います。

シヤリという言葉は、古いインドの言葉、サンスクリット語で「シヤリーナ」を語源とし、漢字で書くと「舍利（しやり）」と書きます。

本来の意味は、身体という意味がありますが、やがて、遺骨、特に聖者の遺骨のことを意味する言葉となりました。

お釈迦さまの遺骨のことを仏の遺骨、「仏舍利（ぶっしやり）」と言います。お釈迦さまが、お亡くなりになった時、その遺骨を求め、八つの国が

争いました。結局、八等分に分け、それぞれの国へ持ち帰り、遺骨を納める為の塔を建て供養しました。

この塔のことを仏舍利塔（ぶっしやりとう）と呼び、別名「ストゥーパ」と言います。このストゥーパが「卒塔婆（そとうば）」つまり、お塔婆の語源で、仏舍利塔の形をまねています。今でも、法事などの法要の時には、塔婆を建てて供養します。

お寿司の「シヤリ」は、その色形が「仏舍利」に似ているところから、そう呼ばれているそうです。



花だより

今年は寒かったこともあり、桜は例年より遅い開花でしたが、ソメイヨシノ、しだれ桜は満開に咲きました。

毎年、春の彼岸前に咲いて、咲き終わるとサクランボの実をつけていた彼岸桜は、天候不順のせいか、または木の寿命なのか、今年はずぼみをつけることなく咲くことはありませんでした。

雑記抄

〜いのちの根〜

春を心待ちにしていたかのように、木々の枝から新芽が一斉に顔を出しました。春は一年の中で、最も生命の息吹を感じる季節です。

冬ナクバ

春ナキニ

という言葉があります。

花咲き誇る春という季節も、冬という寒い季節がなければ、やって来ないという意味です。

木々や草花たちは、冬の間、寒さに耐え、生きるために、そして、春に花を咲かせるために、土の中でしっかり栄養をたくわえます。

もし、一年中春という季節しかなかったとしたら、栄養も不十分で、春を待ちわびる気持ちも持てず、花を咲かせる喜びも半減するかもしれせん。

人生も春のような幸せな時期ばかりではありません。時には冬のような辛い時期もあります。でも、その冬のような辛い時にこそ、生きていく糧がたくわえられ、いのちの根っこが、力強く、静かに伸びているような気がします。



4月12日現在

平成二十四年四月一日
浄土宗西山禅林寺派

常林院

発行